

聖人崇敬における巡礼記念バッジの使用法と機能

Use and Functions of Pilgrim Badges in the Cult of Saints

岩 井 洋

Hiroshi Iwai

The purpose of this paper is to examine the use and functions of pilgrim badges in the cult of saints in medieval Christianity. Pilgrim badges were sold as souvenirs at pilgrim sites. Most pilgrim badges were made of cheap materials such as lead-tin alloy, and depicted shrines or relics associated with holy sites. They were worn by pilgrims as evidence of pilgrimage. This paper begins with a description of the history of studies on pilgrim badges. Then, the origins and development of pilgrim badges are explored. Finally, the various uses and functions of pilgrim badges are examined from the perspective of “the social life of things” advocated by Appadurai, which focuses on the circulation of commodities in social life. In conclusion, this paper suggests that the uses and functions of pilgrim badges were as follows: (1) they were worn as evidence of pilgrimage and as amulets on the way home, (2) they were thrown ritually into the river as votives after completing pilgrimage, (3) they were kept at home as amulets, (4) they were cast on church bells as amulets, (5) they were sewn into the margins of prayer books as relics and tactile devices for “virtual pilgrimage,” and (6) they were placed in private altars as relics and decorative ornaments.

Keywords: the cult of saints, relics, pilgrimage, pilgrim badges, amulets

はじめに

本稿の目的は、西欧中世¹キリスト教の聖人崇敬²において、「巡礼記念バッジ」(pilgrim badges)³がどのように使われ、どのような機能をもったかを明らかにすることである。巡礼記念バッジは、巡礼者が巡礼地で買い求めた巡礼記念品 (pilgrim souvenirs) のひとつであり、通常、鉛やピューター (pewter 錫を主成分とする合金) などの軟質金属で造られている。その表面には、キリストや聖人・聖母のイメージ、聖遺物をはじめとする聖人・聖母に関係する事物などが表現されたり、聖人名あるいはそのイニシャルや教会の名前、短い言葉などが記されたりしている。バッジにはピンや穴がついており、巡礼者が帽子や衣服につけて使用したことがわかる。巡礼記念バッジは、単なる巡礼記念品としてだけでなく、巡礼者であるこ



巡礼記念バッジ

© The Trustees of the British Museum

とを示す徴として使われた以外にも、さまざまな文脈で異なった使われ方をしたと考えられる。そこで本稿では巡礼記念バッジに着目し、聖人崇敬における、その多様な使用法と機能を考察する。

中世キリスト教を特徴づける重要な要素のひとつが聖人崇敬であり、その本質は聖遺物崇敬であったといつてよい (Klaniczay 2014: 220)。聖遺物 (relics) は、第一に聖人の遺骸あるいはその断片、第二に聖人が生前に身につけていた衣服や装身具等、そして第三に聖人の遺骸にふれたもの、などに分類される⁴。教義上、聖人は神と人間との仲介者であり、さまざまな恩恵は、神から聖人を通じて人間にもたらされる。まさにその物質的媒介物が聖遺物である。どのような形態であるにせよ、断片化された聖遺物は移動可能であり、その由来となった場所から遠く離れた複数の場所に運ぶことができる。聖遺物には「奇跡をおこす力」(*virtus*) が宿ると信じられていたから、人々はその力を求めて、聖遺物が安置された場所に巡礼するようになる。かくして巡礼地が各地に成立した⁵。そして、巡礼地あるいは聖遺物の移送中におこったとされる奇跡が文書や口頭で喧伝され、さらに巡礼者を呼び寄せることになる (岩井 2018)。

このように、聖人崇敬の中核には聖遺物というモノがあり、その十全な理解のためには、マテリアリティ (materiality 物質性) に着目せざるをえない。*Material Religion* 誌の発刊 (2005 年) をはじめとして、近年、「物質宗教」 (material religion) 研究がさかんになってきた。これは、従来の教義や儀礼に重点をおいてきた宗教研究に対して、宗教に関連するさまざまなモノの物質性 (素材や形状)、モノが使われる文脈やモノに対する人々の身体的あるいは感覚的な関わりなどについて、総合的に考察しようとするものである。本稿の研究視点も、この潮流のなかに位置づけられ、マテリアリティの側面から聖人崇敬について研究しようとするものである。

以下、まず巡礼記念バッジの研究史を概観し、次に巡礼記念バッジの起源と展開について考察する。そして、さまざまな文脈における、巡礼記念バッジの使用法と機能について考察する。

1. 巡礼記念バッジの研究史

巡礼記念バッジに関する学問的関心は 19 世紀からあった。イギリスでは、1846 年に *Journal of the British Archaeological Association* に掲載された Smith (1846) の論文が、巡礼記念バッジに関する最初の学術的研究であると考えられる (Lee 2014)。Smith は、19 世紀前半に行われた、ロンドンのテムズ川の浚渫工事で出土した巡礼者バッジを研究した。フランスでは、1855 から 56 年にかけて、パリのセーヌ川で水運工事が行われ、橋が架け替えられた際、川底から多くの巡礼記念バッジが発見された。これを契機に、考古学者の Forgeais (1862-1866) をはじめ、多くのコレクターたちが巡礼記念バッジに注目しはじめた (Koldeweij 2012: 209)。19 世紀後半には、一旦、巡礼記念バッジへの関心が衰えたものの、20 世紀に入ると、金属探知機の導入で巡礼記念バッジが新たに発見された (Koldeweij 2012: 194)。とりわけ 1970 年代以降、金属探知機が考古学の分野で活躍するようになった (van Beuningen 2007: 19)⁶。

1960 年代には、イギリス、フランス、ドイツで先駆的な研究が登場した。イギリスでは、1968 年、ロンドン博物館 (Museum of London) の中世古美術の学芸員だった Spencer の論文 (Spencer 1968) が発表され、同年フランスで、セーヌ川から出土した巡礼記念バッジに関する Lamy-Lassalle の研究 (Lamy-Lassalle 1968) が発表された。ドイツでは、1963 年、教会の鐘に鑄込まれた巡礼記念バッジを手がかりにした Köster の研究 (Köster 1963) が発表された。第二次世界大戦中のドイツでは、武器生産に必要な金属資源を得るため、各地の教会から鐘が供出された。そのもっとも大規模な集積場が、「鐘の墓場」 (Glockenfriedhof) と呼ばれたハンブルク港であった。Köster は、戦後、残された鐘と資料を手がかりに、15 世紀に活躍した鐘職人 Tilman von Hachenburg の研究 (Köster 1957) とともに、巡礼記念バッジの研究を発展させた。

1980年代以降、各地で巡礼記念バッジに関する重要な研究が発表されるようになる。イギリスでは、Spencerの古典的著作（Spencer 1980, Spencer 1998）が出版され、オランダでは、Koldeweijを中心とする諸研究（Koldeweij and De Bodt 1985, van Heeringen et. al. 1988）が発表された。1994年には、美術史の分野ではじめて巡礼記念バッジをテーマとした博士論文（Blick 1994）が登場し、その翌年にはフランスで、Lamy-Lassalleの研究を展開させたBrunaの博士論文（Bruna 1995）が発表された。この他にも重要な研究として、Blickの編集によるSpencerの記念論文集（Blick 2007）やHerbersとKühneが編集した論文集（Herbers and Kühne 2013）などがあげられる。また、KühneとHrdina監修の『ヨーロッパ巡礼研究』（Europäische Wallfahrtsstudien）シリーズ（2004-2020, 12 vols., Frankfurt am Main: Peter Lang）やvan BeuningenとKoldeweijを中心とする『聖と俗』（Heilig en Profaan）シリーズ（1993-2018, 4 vols. Cothen: Stitching Middeeuwse Religieuze en Profane Insignes）には、巡礼記念バッジに関する重要な論考が含まれている。さらに、イギリス、フランス、ドイツ、オランダの研究に加え、東欧や北欧で出土した巡礼記念バッジに関する研究も蓄積されつつある（Rębkowski 2013）。

これまでの研究によって明らかにされてきたことは、特定の聖人に対する信仰圏の広がりである。巡礼記念バッジは、通常、巡礼地で販売されたものと考えられるから、出土された巡礼記念バッジからその巡礼地が判明する。そして、その分布をみることで、聖人崇敬の信仰圏の広がりや巡礼ルートがわかる。たとえば、ポーランドのバルト海沿岸地域から出土した13世紀から14世紀にかけての巡礼記念バッジのなかには、ドイツのケルンに関連するとみられるものや、スペインのサンチャゴ・デ・コンポステーラ巡礼の象徴であるホタテ貝がみられる（Rębkowski 2013）。このような信仰圏や巡礼ルートの解明は、都市間における宗教・経済・政治的ネットワークを明らかにする手がかりにもなる。

ただし、出土した巡礼記念バッジから信仰圏等を推定する場合、ひとつ留意すべき点がある。それは、巡礼記念バッジが出土した地域にはある程度の共通性があり、それらが酸化による腐食をのがれた地層から見つかっていることである。このことは、19世紀における巡礼記念バッジへの関心が、河川の浚渫工事を契機にしていたこととも関連する。つまり、地層によっては多くのバッジが腐食して消滅した可能性がある。たとえば、オランダのスヘルトーヘンボスの聖母マリアに関する奇跡集には、南西部のゼーラントのものが多いが、ほかにも北部のフローニンゲン、ドイツのドルトムント、ベルギーのブリュッセルなどのものも含まれている。しかし、スヘルトーヘンボスの聖母マリアに関する巡礼記念バッジは、これらの地域では出土していない。その意味で、出土地域をそのまま信仰圏と推定することはできず、信仰圏が出土地域よりも広い地域にまで広がっていた可能性もある（Kruip 2011, Simonsen 2018）。

巡礼記念バッジを手がかりにして、多角的な研究を展開するために重要となるのがデータベースの存在である。1998年、オランダのナイメーヘン・ラドバウド大学とオランダ科学研究機構が、共同で巡礼記念バッジのデータベースKunera⁷を構築した。ここには約15,000の巡礼記念バッジやアンプラ（後述）が記録されており、そのなかには、現在は国立ゲルマン博物館に所蔵されている、Kösterによる巡礼記念バッジの分類カード（Pilgerzeichenkartei）も含まれている。

さて、日本における巡礼記念バッジの研究についてもふれておく。日本においては、歴史学や美術史の分野で巡礼記念バッジの存在について言及したものもあるが、それを主題とした研究は秋山の論文（秋山 2004）がほぼ唯一のものとみられる。他には、聖遺物崇敬の文脈で巡礼記念バッジをとりあげた同じく秋山の研究（秋山 2005, 2009）や、ケルンの巡礼について論じる際に巡礼記念バッジをとりあげた猪刈の研究（猪刈 2009）などがあげられる。

2. 巡礼記念バッジの起源と展開

次に、巡礼記念バッジの起源と展開について論じる。巡礼記念バッジを巡礼記念品のひとつと考えるならば、まず巡礼地で記念品を求めるという慣行について考える必要がある。キリスト教の歴史において、巡礼者が記念となるモノを持ち帰ることは、エルサレム巡礼が行われた時代からあった。製品化された記念品がなかった時代、巡礼者たちは、聖墳墓（キリストの墓）や聖人に関わる場所から石片・木片・水・油・土などを持ち帰ることで、巡礼を想起する手がかりとした。たとえば、4世紀にエルサレムを訪れた女性 Egeria は、キリストが磔になったとされる十字架の木片を持ち帰ったと記録している（Hahn 1990: 85）。このようにして持ち帰られたモノには神の力が宿るものと信じられ、その力は「エウロギア」（*eulogia* 祝福の意味）と呼ばれた。のちに、それらを入れる携帯用容器やメダルあるいはトークン（token）などもエウロギアと呼ばれるようになった（Caner 2006）。

5世紀後半には、エルサレム、聖シメオンに関わるシリアの巡礼地、そしてアレキサンドリアの聖メナスの巡礼地では、アンブラ（ampulla）やトークンが製造・販売されるようになった。前者は、聖遺物にふれたとされる油⁸や巡礼地の水などを入れる容器で、5・6センチ程度の小型の素焼きのものだった。また、ペンダントとして携帯できるように、平らで薄くつくられていた。後者は、聖遺物にふれたとされる土で焼かれたコイン状のものである（Sweeney 2018: 121-122）。アンブラとトークンの表面には、聖人の肖像が刻印されていた。これらは、巡礼記念バッジへと発展する原型といえる。

これまでの研究によると、巡礼記念バッジが登場したのは11世紀で、16世紀まで巡礼地で製造・販売されたという⁹。16世紀の衰退は、宗教改革において、聖遺物崇敬を中心とする聖人崇敬が批判されたことによる。11世紀に巡礼記念バッジが最初に登場したと考えられるのは、サンチャゴ・デ・コンポステーラである（Spencer 1996, Haasis-Berner 2002）。

当地は、9世紀に聖ヤコブの墓が発見され、中世を通じてエルサレムとローマにならぶキリスト教の三大聖地のひとつであった。はじめ巡礼者たちは、ガリシアの海からホタテ貝の貝殻をひろって記念品としていた。北西ヨーロッパの大西洋沿岸に生息する「ヨーロッパホタテ」（*Pecten maximus*）は、別名「聖ヤコブの貝」（coquille Saint-Jacques [仏] , St. James Shell [英]）とも呼ばれる。フランス内陸部からサンチャゴ・デ・コンポステーラへの巡礼ルートを見ると、スペイン国内のルートは、まさにヨーロッパホタテの生息域に沿っている。ホタテ貝がサンチャゴ巡礼あるいは聖ヤコブの象徴となった理由には諸説ある。たとえば、聖ヤコブの杖にホタテ貝がつけられていたという説、海に落ちた騎士が聖ヤコブに祈り、命を救われて海からあがってきた時に、からだにホタテ貝がびっしりとはりついてたという伝説にもとづく説や、貝が生殖と豊穡のシンボルであり、巡礼者の再生をあらわすという説などである。

やがて、ホタテ貝に穴をあけてバッジとして売る業者が登場するが、その利益が大きいため、教会側が販売を許認可制にし、区域外での販売は破門の対象となった（Blick 2019）。その後、本物のホタテ貝は、ホタテ貝をかたどった金属製のバッジへと変化していく。さらに、サンチャゴ巡礼の象徴であったホタテ貝が巡礼の象徴へと変化し、他の巡礼地でもホタテ貝をかたどった巡礼記念バッジが造られるようになった¹⁰。

12世紀になると、フランスのロカマドゥール、イギリスのカンタベリーやローマをはじめとして、ヨーロッパ各地で金属製の巡礼記念バッジが製造・販売されるようになる。最初は小さな額のような形状をしていたが、その後、多様な形状とデザインが登場し、14世紀には透かし細工の技術を使ったものもあらわれた。また、人気の巡礼地では、複数のデザインの巡礼記念バッジも販売された。Köster（1984）は、中世において257の教会で、巡礼記念バッジをはじめとする記念品が生産されていたと指摘する。

巡礼記念バッジの型は石でつくられ、印章を彫る職人や金匠（goldsmith）が彫ったとされる

(Spencer 1996)。型を使うことで、巡礼記念バッジの大量生産が可能になった (Jeater 2020)。おそらく 12 世紀の後半には、巡礼記念バッジが大量生産されていたと考えられる (van Asperen 2013)¹¹。15 世紀になると、真鍮の地金に金型を押しつけて、薄いバッジを製造する方法が生まれた。この製造方法によるバッジは、「ブラクテアート」(bracteate 薄型の貨幣) と呼ばれ、本物の金の巡礼記念バッジを買うことできない人々の需要に応え、黄色の真鍮をその代用品としたものである (Blick 2010)。このように、さまざまな技術が集約されて巡礼記念バッジが製造されてきたことを考えると、ある時期に突如として巡礼記念バッジなるものが登場したとは考えにくい。技術史的には精密な分析が必要だが、素材を成型しイメージを押しつける、あるいはイメージが刻まれた型に素材を流し込むという点では、刻印・貨幣 (あるいはコイン)・バッジという展開は連続的なものとしてとらえることができる¹²。つまり、それまでにあった貨幣の鑄造技術や装飾品等の金銀細工の技術の蓄積のうえに、巡礼が盛んになるにつれて、巡礼記念バッジという新しい需要が発見されたと考えたほうがよい。

なお、巡礼記念バッジの原型ともいえるアンブラは消滅したわけではなく、巡礼地によっては巡礼記念バッジとともに販売された。たとえば、12 世紀以降、イギリス最大の巡礼地となったカンタベリーでは、カンタベリー大司教トマス・ベケット¹³の血がまじった聖水が奇跡をおこすとされ、アンブラに入れて売られた。

さて、サンチャゴ・デ・コンポステーラにおいて巡礼記念バッジの製造・販売が教会による許認可制であったように、巡礼記念バッジの製造・販売は大きな「巡礼ビジネス」(Bell and Dale 2011)であった。たとえば、スイスのアインジーデルンで、1466 年 9 月の二週間に 13,000 個の巡礼記念バッジが売れた (秋山 2009: 177-178)。また、1492 年、ドイツのアルトエッティングでは、聖母マリア像を訪れた巡礼者に 130,000 個の巡礼記念バッジが売られた (Jeater 2020: 91)。さらに、同じくドイツのレーゲンスブルクでは、1519 年に 50,000 人以上の巡礼者が訪れ、ピューター製 10,172 個、銀製 2,430 個の巡礼記念バッジ売れたが、それでも 23,000 個以上不足し、泣く泣く手ぶらで帰らざるをえない巡礼者もいたと伝えられる (秋山 2004: 100)。翌年には、ピューター製 109,198 個、銀製 9,763 個の巡礼記念バッジが売られた (Jeater 2020: 91)。

このような状況から、当初、教会側は巡礼記念バッジの製造・販売を独占しようとしたが、結局、業者に製造・販売権を付与するかたちをとる巡礼地が多かった。たとえば、ロカマドゥールでは、英仏戦争 (1202～14) のあいだ巡礼記念バッジがパスポートと同等の役割を果たしたこともあり、巡礼記念バッジの付加価値が高まり、販売権をめぐる争いがおこった。結局、ヴァロン (Valon) 一族がその利権を獲得して富を築いた。教会側は、その利益の一部を教会運営にあてることができた。このような巡礼記念バッジをめぐる利権争いは、サンチャゴ・デ・コンポステーラやフランスのル・ピュイなどでもおこった (Webb 2001: 127)。

3. 巡礼記念バッジの使用法と機能

では、本稿の主題である、巡礼記念バッジのさまざまな使用法と機能について考察する。巡礼記念バッジが巡礼記念品としてだけでなく、さまざまな使われ方をしてきたことは、従来の研究ですでに指摘されてきた (Koldewey 1999, Blick 2010, Simonsen 2018)。前述のように、地域や時代によっては、巡礼記念バッジがパスポートと同等の役割を果たしたように、それ自体が巡礼者としてのステータスをあらわす徴として機能した。そして、巡礼記念バッジを身につけていることで、食事、宿泊、医療等の便宜をうけることができた。また、巡礼記念バッジ自体が、奇跡をおこす聖遺物として認識され、さらには護符 (talisman) あるいは呪符 (amulet)¹⁴として使われたことも、これまでの研究が明らかにしてきた。ここでは、これらの使用法と機能を「モノの生活史」という視点からとらえなおしてみたい。

マテリアリティ研究でしばしば引用される Appadurai 編の論文集『モノの社会生活』(The Social Life of Things) (Appadurai 1986) は、本研究にとっても示唆的である。Appadurai は、人間と同じくモノにも生活史があり、モノの交換価値は、そのモノがたどった文化的プロセスのなかで理解する必要があることを指摘する。Kopytoff の論文 (Kopytoff 1986) では、すべてのモノには、交換可能な商品になる可能性 (商品化 commoditization) と交換不可能なモノになる可能性 (脱商品化 decommoditization) の両方が秘められており、そのダイナミズムをとらえる必要性が示されている。また Geary (1986) は、中世において聖遺物が商品化され、流通していたことを描いている。

3.1 商品から聖遺物へ

これらの視点を援用すると、「巡礼記念バッジの生活史」という観点から巡礼記念バッジの使用法と機能を論じることができる。まず、巡礼地で商品として購入された巡礼記念バッジは、その時点においては、ただのバッジ (= 商品) にすぎない。そこに聖人の力を宿らせるためには、聖遺物にふれる必要がある。といっても、通常、聖遺物は聖遺物容器 (reliquary)¹⁵ や石棺などに納められているから、直接、聖遺物にふれることはできない。そこで、巡礼者たちは石棺などに直接ふれることで聖人の力を得ようとした。また、それがかなわない場合でも、できるだけ聖遺物の近くによることで力を得ようとした。

巡礼記念バッジを一種の聖遺物へと変える、別のいいかたをすれば、商品を変換不可能なかけがえないものに変える方法として、興味深い事例がある。それは、活版印刷技術の発明者であるグーテンベルクが、ひそかに開発しようとしていた「鏡付き巡礼記念バッジ」である (秋山 2004)。

1430 年代後半から 40 年代前半にかけて、グーテンベルクは、シュトラスブルクでいくつかの事業に関わった。そのひとつが「巡礼者の鏡」の製造である。これは、1438 年にアーヘンで行われる予定だった聖遺物の公開を見込んで、鏡がついた巡礼記念バッジの製造・販売することであった。アーヘンには、重要な聖遺物が 4 つあった。すなわち、イエスが生まれた夜に聖母マリアが着ていたローブ、イエスの産着、洗礼者ヨハネが斬首されたあとに首を包んだとされる布、イエスが磔の際に身につけていた腰布、などである。これらは、13 世紀にアーヘン大聖堂の「聖母マリアの聖遺物箱」(Marienschrein) に納められたとされ、1349 年から 7 年に一度、公開されるようになり、その機会に巡礼者がアーヘンに押し寄せた。1496 年には、1 日に 146,000 人に巡礼者が市門を通過したとの記録もあるが、その数字自体を鵜呑みにできないものの、活況を呈したことはうかがえる¹⁶。

さて、グーテンベルクの事業は結果的には頓挫したが、その製造技術はのちの活版印刷技術の発明に活かされたと考えられる。グーテンベルクが開発しようとしていたものと同型と考えられる、現存するアーヘンの巡礼記念バッジをみると、聖遺物のイメージとともに鏡をはめこむための丸い枠がある。鏡自体は現存しないため、それがどの程度の完成度であったのかを正確に知ることはできない¹⁷。同じようなデザインの鏡付き巡礼記念バッジは、ドイツだけではなく、フランス、ベルギー、オランダにもみられる。これらは、15 世紀以降に製造されたものと考えられる。

ここで重要なのは、鏡の意味である。聖遺物は、高い場所で公開されたり、教会の壁に安置されたりするようになり、大衆押し寄せた巡礼者は、それらを遠くからみることしかできなかった。中世後期の巡礼の場面を描いた絵には、人々が鏡を高く掲げている様子が描かれている (Green 2012: 36)¹⁸。つまり、巡礼者たちは、鏡に聖遺物を映し、聖遺物から発せられる力を巡礼記念バッジのなかに受けとめようとしたのである。そして、このようにして聖遺物から放射される力を受けとめた巡礼記念バッジは、一種の聖遺物へと変化すると考えられた¹⁹。

このような鏡の使い方は、けっして滑稽なものではなく、古代から鏡が不思議な力をもつと信じられてきたことと考えあわせれば、容易に理解できる (Gregory 1997)。また、14 世紀の終わりからド

イツ・ニュルンベルクの謝肉祭の時期に行われていた、食肉業者のギルドによる「シェムバルトラウフ」(Schembartlauf) と呼ばれるダンスでは、緑の枝木に小さな鏡をつるしたものを持つ者が登場した (Scribner 1978, 渡邊 2006)。緑の枝木は豊作を、鏡は春の光が増すことを祈願していると考えられる (Kinser 1986: 6)。

さて、聖遺物と化した巡礼記念バッジは、身につけることで護符・呪符としての機能をもつとともに、巡礼の帰路においては、巡礼者であることを示す徴としても機能した。そして、巡礼の出発点へともどった巡礼者にとって、巡礼記念バッジには巡礼完遂の証という機能が加わる。では、その後、巡礼記念バッジがどのようにあつかわれたのだろうか。可能性としては、保持・廃棄・再利用の3つが考えられる。

3.2 護符と儀礼的廃棄

まず保持については、護符・呪符の延長線上に考えることができる。たとえば、巡礼記念バッジを水やワインに浸して、それらを薬として飲む使い方があったことは知られている (Blick 2010)。また、オランダのアムステルダムからは、ドイツのヴィルスナックとブロムベルクの巡礼記念バッジが、家のかたちをした板にはりつけられていたのが見つかっており、護符としてあつかわれていたと考えられる (Jeater 2020: 94)。この他にも、ベッドの頭上につるしたり、厩舎につるしたりして、加護をえようとした例もある (Spencer 1968: 144)。

廃棄についてはどうだろうか。前述のように、巡礼記念バッジの多くは河川の周辺から見つかっており、それらが廃棄されたものなのかどうかについては意見がわかれる。鉛やピューターといった巡礼記念バッジの素材を考えると、腐食をのがれた地層から見つかりやすかったと考えることができる一方で、巡礼者が旅の終わりに感謝の意味をこめて川に巡礼記念バッジを投げ入れたのだ、という説もある (Spencer 1998: 24)。

Garcia は、Turner の儀礼理論 (Turner and Turner 1978) を援用し、巡礼から帰還した巡礼者たちが元の生活にもどるにあたって、その境界にあたる川で、奉献 (votive) の意味をこめて儀礼的に巡礼記念バッジを投入したのだという。また、水は清浄や治癒の象徴性を想起させることも付けくわえている (Garcia 2005)。これに対して Lee は、川を渡る際に祈るという古代の異教的な伝統や迷信の観点から、巡礼記念バッジの川への投棄を説明する必要はないという。そして、多くの巡礼者は、巡礼地で崇敬された聖人のイメージと、衣服につけるために購入され、やがて廃棄されるような、安価で大量生産されたモノを明確に区別していたと指摘する (Lee 2014)。さらに Courtenay は、浚渫工事で多くの巡礼記念バッジが見つかった場所をみると、両替商や金匠などが店をかまえた商業施設や病院などの慈善施設の下、あるいはそれらに隣接する川底からバッジが見つかっており、巡礼者が川に巡礼記念バッジを投げ入れたとは考えられないという (Courtenay 1972: 277)。

このように、巡礼記念バッジが河川付近から出土する理由として、儀礼的廃棄や単純廃棄、あるいは場所の有意性などの説があるが、どれかひとつが正しいというわけではないだろう。おそらく、地域や巡礼者によって行動にばらつきがあり、理由は複合的であると考えたほうがよい。

3.3 アサンブラージュ

では、巡礼記念バッジの再利用についてはどうだろうか。まず、前述の Köster の研究の原点ともなった、教会の鐘に巡礼記念バッジを鋳込むという再利用法がある。この慣行は、ドイツを中心に広範にみられ、巡礼記念バッジを一種の護符として使用しているものと考えられる。つまり、巡礼者の帰還後、その役目を終えた巡礼記念バッジが、聖人の力が込められたものとして鐘に鋳込まれたのである。鐘には古くから悪霊を防ぐ力があると信じられ、5世紀頃からキリスト教の祭祀で使われはじ

め、修道院から他の教会へと広がっていった。また、晴天祈願のために鐘を打ち鳴らすこともあり、呪術的な使われ方をしていたことがわかっている (Kriss-Rettenbeck & Hansmann 1966=2014: 332-333, 阿部 1983: 319-320, 魚住 1997: 153)。したがって、鐘の響きによって呪力が伝播し、教会を中心とする共同体を守ると考えられたのだろう。このことは、中世において鐘の音が響く範囲が、ひとつの共同体をなしていたこととあわせて考える必要がある (阿部 1983, 魚住 1997)。

さて、巡礼記念バッジの再利用として興味深いのは、15 世紀から 16 世紀にかけてのネーデルラントの祈祷書 (prayer book) あるいは時祷書 (book of hours) のなかにあらわれた巡礼記念バッジである。この時期の祈祷書には、パーチメント (羊皮紙) の余白に巡礼記念バッジが縫いつけられているものがみられる。バッジが現存するものもあるが、縫いつけられたあとや縫い穴のみが残るものもあり、コレクター等によって、後世にはがされたものと考えられる。これらの所有者は、ある程度の階層の人物とみられるが、祈祷書を贈り物として受け取り、それらに自分なりのアレンジを加えて、あらたにバッジを縫いつけたと思われるものもある。したがって、祈祷書の所有者が、縫いつけられたバッジが発行された巡礼地に行ったことがない場合もあるし、バッジのみを誰かから贈られた可能性もある (Forster 2011a, 2011b, Rudy 2016a, 2016b, Vandi 2019)。この場合、一種の聖遺物あるいは護符としての機能を保持しつつも、巡礼記念バッジは巡礼地の文脈から切りはなされて、祈祷書を装飾するオーナメントとして使われたといえる。

祈祷書のなかの巡礼記念バッジがあらわれた背景には、「心の巡礼」 (mental pilgrimage) あるいは「仮想巡礼」 (virtual pilgrimage) (Rudy 2011) と呼ばれるものがある。これは、身分的に外出を厳しく制限された修道女や、さまざまな制約によって実際の巡礼が困難であった人々が、テキストや図像を手がかりにして、心の中で仮想の巡礼を実践するものである。15 世紀後半には、多くの聖地巡礼記が出版され、それらが仮想巡礼の手がかりにもなったと考えられる。また、仮想巡礼自体はヨーロッパ全体にみられた現象であるが、とりわけネーデルラントに多くの痕跡が残り、仮想巡礼が実践された背景には、「新しい敬虔」 (Devotio Moderna) に代表される内省的な宗教運動の流行もある (青谷 2015: 70)。

現存する祈祷書の分析によると、仮想巡礼の実践がかいまみられる。たとえば、祈祷書に縫いつけられた巡礼記念バッジの表面、キリストや聖母マリアの画像の表面には擦り減ったあとがみられ、祈祷書の所有者が、視覚的だけではなく、イメージに触れることで、触覚的にも時祷書を利用していたことがわかる (Vandi 2019, Ganz 2012)。まさに巡礼記念バッジや刺繍は、触れることのできる聖遺物であったといえる。

なお、15 世紀後半になると、オランダ南部やフランス北部の工房では、実際のバッジのかわりに、「トロンプ＝ルイユ」 (Trompe-l'œil 騙し絵) としてバッジの絵を描く手法があらわれている (Vandi 2019)。

巡礼記念バッジの再利用に関する最後の事例として、「閉ざされた園」 (enclosed garden, *hortus conclusus*)²⁰ における再利用があげられる。近年、ベルギーのメヘレンの修道院に保存されていた、「閉ざされた園」と呼ばれる小型の祭壇が注目され、研究がすすめられている (Watteeuw & Iterbeke 2018, Baert 2018)。この祭壇は、小さなキリスト像や聖母マリア像などを中心に、ペーパークラフトの花、聖遺物、巡礼記念バッジなどで飾られている。現存するいくつかの「閉ざされた園」は、16 世紀前半に修道女が製作したものとされる。これも、巡礼記念バッジが縫いつけられた祈祷書と同様に、宗教的实践においてを視覚的・触覚的なイメージを喚起する装置として使用されたものと考えられる。

ここで紹介した祈祷書と「閉ざされた園」は、いずれも美術でいう「アサンブラージュ」 (assemblage 立体的なモノを寄せ集めた美術作品)²¹ といえる。そして、巡礼記念バッジは、再利用

のすえにアサンプラージュのための部品となったが、そこでは触覚的な宗教イメージを喚起する装置として、あらたな機能を獲得したといえる。

おわりに

本稿では、Appadurai の「モノの社会生活」という観点に依拠し、西欧中世キリスト教の聖人崇敬における巡礼記念バッジの使用法と機能について考察した。巡礼地における商品としての巡礼記念バッジの購入にはじまり、巡礼からの帰還、さらにその後という時間軸に沿って見たとき、そこには多面的な意味づけと機能があった。購入された巡礼記念バッジは、何らかのかたちで聖遺物と接触することで一種の聖遺物と化し、それが巡礼者の徴や護符・呪符としての機能をもちながらも、巡礼が完遂されたのちには、場合によっては儀礼的に廃棄される場合もあった。保持される場合には護符・呪符の機能をもち、鐘に鑄込まれて再利用される際も、同様の機能を保持した。祈祷書に縫いつけられたり、「閉ざされた園」に飾られたりする場合、巡礼記念バッジは聖遺物としての性質とともに装飾部品の一部としての機能をもち、仮想巡礼の実践にあたっては、視覚的・触覚的イメージを喚起する重要な装置になった。

本稿では、紙幅の関係で、各項目について十分に議論を展開することができず、巡礼記念バッジ研究に関する導入的紹介にとどまった。とりわけ、巡礼記念バッジの再利用についての詳細な議論については、稿をあらためて論じたい。

注

- 1 ここでは、おおむね 5 世紀から 15 世紀をさすが、時代区分については意見が分かれる。Brown (1971) や Le Goff (2003) の議論や『思想』1149 号の特集「時代区分論」(2020 年 1 月刊)を参照。
- 2 キリスト教では、神のみを対象とする「崇拜」(*adoratio*)と聖人・聖母に対する「崇敬」(*veneratio*)を区別する。ただし現実には、聖人・聖母に対する「崇拜」と呼んでよい現象がみられるが、本稿ではキリスト教の慣例にしたがい、「崇敬」という用語を使う。
- 3 直訳すれば「巡礼者バッジ」であるが、巡礼記念品ののひとつという意味で、秋山 (2009) にならない、本稿では「巡礼記念バッジ」と呼ぶ。なお猪刈 (2009) は、pilgrim badges のドイツ語にあたる Pilgerzeichen を「巡礼章」と訳している。
- 4 Hooper は、比較文化的な観点から聖遺物を 3 つに分類している (Hooper 2014)。
- 5 インド・イスラーム世界の聖遺物に関する小牧の次の指摘は、中世キリスト教における聖人崇敬を考える際にも示唆的である。「聖遺物は、移送可能な動産であることから新たな巡礼地を生み出す可能性を秘めており、聖地を求める人々——管理者となって富を築く者も、巡礼者となって幸福を願う人も——は競って聖遺物を求め、招致を歓迎した」(小牧 2002: 131-132)。
- 6 イギリスでは、1974 年から 76 年にかけてロンドンのテムズ川で発掘調査がおこなわれ、巡礼バッジが出土した (Lee 2014: 3)。現在でもロンドンのテムズ川流域では、干潮時の「泥さらい」(*mudlarking*)によって、巡礼記念バッジをはじめとする様々な歴史的資料が出土している。イギリスでは、「マッドラーク」(*mudlark*)と呼ばれる泥さらいをする人々はライセンス制になっており、「財宝法」(*Treasure Act 1996*)により、出土品について価値に応じて申告することとなっている。「泥さらい」については、(Maiklem 2019)を参照。
- 7 <https://www.kunera.nl> (2021 年 10 月 20 日アクセス)。データベースの名称は、オランダ中部の都市レーネンで崇敬されていた聖人の名前に由来するという。
- 8 聖遺物を納めた石棺の上部にあいた穴から油を注ぎ、側面下部の排水口から流れてた油を受けることで、油を聖遺物に変えるリパティオンと呼ばれる儀式が行われていたという (秋山 2009: 175)。
- 9 現在も、巡礼記念バッジはかたちを変え、メダルとして販売されている。
- 10 フランスのモン・サン・ミッシェルのホタテ貝のバッジは、ドラゴンを倒す天使ミカエルの姿をあしらったものだった (Cohen 1976: 196)。また、15 世紀のものと思われる、イギリスのウースター大聖堂に埋められた巡礼者の遺体には、装飾品として「ザル貝」(*Cardium burchardi*)がつけられていた (Webb 2001: 125)。これは、ヨーロッパホタテが生息しない地域における代替品と考えられる。ザル貝はホタテと同じく、表面に放射肋(ろく)(放射線状の筋)をもつが、ホタテよりも小ぶりで、5〜7センチ程度

のものである。

- 11 産業史的な背景をみると、300 年から 1300 年にかけて、イギリスはピューターの原料となる錫の重要な産地であった。12 世紀には、フランスやフランダースにかなりの量の錫が輸出され、そこからさらにヨーロッパ各地に輸出された (Homer 1991: 57)。また、ヨーロッパでは、13 世紀後半にピューターのギルドが成立していた (Homer 1991: 68)。
- 12 「ジェトン」(jetons) と呼ばれる、宗教的な画像が刻印されたコイン状のものも、巡礼記念バッジと同じ役割を果たしていた (Carroll 1989: 23)。また、中世初期のトークンは、*signi, merelli, marelli*, あるいはフランス語で *méreaux* と呼ばれ、労働者への賃金、納税、領収書、会員証など、さまざまな機能を果たした (Courtenay 1972: 277-278)。そう考えると、コインやトークンと巡礼記念バッジとの親和性がみえてくる。
- 13 国王ヘンリー 2 世と教会の自由をめぐる対立し、1170 年、カンタベリー大聖堂で 4 人の騎士によって暗殺された。教会にはベケット廟が置かれていたが、16 世紀のイングランド宗教改革で破壊された。なお、14 世紀にチョーサーのよって書かれた『カンタベリー物語』(The Canterbury Tales) には、カンタベリー巡礼にむかう人々が描かれている。
- 14 護符と呪符の区別はしばしば曖昧である。Kris-Rettenbeck と Hansmann は、前者を受動的に持ち主の身を守るもの、後者を他に能動的に働きかけて、持ち主に幸福をもたらすものというニュアンスで使用している (Kris-Rettenbeck & Hansmann 1966)。ただし、それらを用いる当人にとっては、そのような区別は重要ではないと考えられる。
- 15 聖遺物容器についての包括的な研究については、(Hahn 2017) を参照。
- 16 本稿では詳細に論じることができないが、中世に大量の巡礼現象が生まれた背景には、「煉獄・聖年・贖宥」という 3 つのキーワードがある。12 世紀後半以降、天国と地獄のあいだにあり、人々が罪の贖いをする「煉獄」(*purgatorium*) の思想が浸透する (Le Goff 1981)。1300 年には、教皇ボニファティウス 8 世が、はじめての「聖年」(Jubilee year) を宣言し、ローマ巡礼を果たし、一定の行を終えた者に対して、あらゆる罪の贖いを免除する「全贖宥」をあたえると宣言した。聖年はその後も布告され、ローマ以外の巡礼地への巡礼に対しても、一定の贖いを免除することが宣言された (青谷 2011, 2015)。このような背景があり、大規模な巡礼が加速化されたといえる。
- 17 おそらく、銀メッキされた凸面のものであったと考えられる (Merback: 189)。
- 18 小倉 (2019) は、ドイツのシュパイヤー大聖堂の建築様式をとりあげ、15 世紀頃には、大聖堂の「小型ギャラリー」(*dwarf gallery*) が、聖遺物を顕示するために使用されたことを指摘している。また、マーストリヒトの聖セルヴァティウス聖堂のアプシス (*apsis* 半円形の突出部分) やトリニア大聖堂のアプシスも、同様の使われ方をしたという。
- 19 このような実践は、人類学の古典的な概念のひとつである「感染呪術」(*contagious magic*) を想起させる。つまり、一度接触したものは、距離がはなれたのちもその力を持ち続けるという観念である (Frazer 1890)。
- 20 『旧約聖書』の「雅歌」第 4 章 12 節に登場する、聖母マリアの隠喩としての「閉ざされた園」と関連すると考えられる。
- 21 Kriss-Rettenbeck と Hansmann は、さまざまな護符に巡礼記念バッジと思われるものを組み合わせた複合的な護符を紹介している (Kriss-Rettenbeck & Hansmann 1966=2014: 260-261)。これらは、霊力があるものを寄せ集めて、さらにその力を高めようとしたものと考えられる。

参考文献

- 阿部謹也, 1983, 『中世の星の下で』 影書房。
- 秋山 聰, 2004, 「複製品にどのように聖性が宿りうるのか: グーテンベルクと鏡付き巡礼記念巡礼者バッジをめぐる」『西洋美術研究』 11, pp. 94-107.
- 秋山 聰, 2005, 「聖なる見世物のための版画: ライン・マース地方の聖遺物展観と『聖遺物版画』」『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系』 57, pp. 69-83.
- 秋山 聰, 2009, 『聖遺物崇敬の心性史: 西洋中世の聖性と造形』 講談社。
- 青谷秀紀, 2011, 「赦しのポリティクス: 中世後期ネーデルラント都市の聖年とブルゴーニュ公」『清泉女子大学紀要』 59, pp. 21-36.
- 青谷秀紀, 2015, 「中世後期ネーデルラントにおける聖地の表象と贖宥」『史林』(史学研究会) 98 (1), pp. 69-102.
- Appadurai(ed.), 1986, *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Baert, Barbara, 2018, *Art and Mysticism as Horticulture: Late Medieval Enclosed Gardens of the Low*

- Countries in an Interdisciplinary Perspective, in Helen Appleton and Louise Nelstrop(eds.), *Art and Mysticism: Interfaces in the Medieval and Modern Periods*, London: Routledge, pp. 104-127.
- Bell, Adrian R. and Richard S. Dale, 2011, The Medieval Pilgrimage Business, *Enterprise & Society*, 12(3), pp. 601-627.
- Blick, Sarah, 1994, A Canterbury Keepsake: English Medieval Pilgrim Souvenirs and Popular Culture, PhD Dissertation, University of Kansas.
- Blick, Sarah,(ed.), 2007, *Beyond Pilgrim Souvenirs and Secular Badges: Essays in Honour of Brian Spencer*, Oxford: Oxbow.
- Blick, Sarah, 2010, Pilgrim Badges, in Larissa J. Taylor et. al.(eds.), *Encyclopedia of Medieval Pilgrimage*, Leiden: Brill, pp. 520-524.
- Blick, Sarah, 2019, Bringing Pilgrimage Home: The Production, Iconography, and Domestic Use of Late-Medieval Devotional Objects by Ordinary People, *Religions* 2019, 10, 392; doi:10.3390/rel10060392.
- Brown, Peter, 1971, *The World of Late Antiquity: AD 150-750*, London: Thames & Hudson. (足立広明訳, 2006,『中世末期の形成』慶應義塾大学出版会) .
- Bruna, Denis, 1995, Les Enseignes de pèlerinage et les enseignes profanes au moyen âge, PhD Dissertation, Université de Paris I.
- Bruna, Denis, 1996, *Enseignes de Pèlerinage et Enseignes Profanes (Musée National du Moyen Age - Thermes de Cluny)*, Paris: Réunion des Musées Nationaux.
- Caner, D, 2006, Towards a Miraculous Economy: Christian Gifts and Material 'Blessings' in Late Antiquity, *Journal of Early Christian Studies*, 14, pp. 329-377.
- Carroll, Michael P., 1989, *Catholic Cults and Devotions: A Psychological Inquiry*, McGill-Queens University Press.
- Cohen, Ether, 1976, *In haec signa: Pilgrim-badge Trade in Southern France*, *Journal of Medieval History*, 2(3), pp. 193-214.
- Courtenay, William J., 1972, Token Coinage and the Administration of Poor Relief during the Late Middle Ages, *The Journal of Interdisciplinary History*, 3(2), pp. 275-295.
- Forgeais, Arthur, 1862-1866, *Collection de plombs historiés trouvés dans la Seine et recueillis par Arthur Forgeais*, 5 volumes, Paris.
- Foster, Megan H., 2011a, Pilgrimage through the Pages: Pilgrims' Badges in Late Medieval Devotional Manuscripts, Ph.D. Dissertation, University of Illinois at Urbana-Champaign.
- Foster, Megan H., 2011b, Pilgrimage through the Pages: Pilgrims' Badges in Late Medieval Devotional Manuscripts, in Sarah Blick and Laura Gelfand(eds.), 2011, *Push Me, Pull You: Art and Devotional Interaction in Late Medieval and Early Modern Europe*, Leiden: Brill, pp. 227-274.
- Frazer, James, 1890, *The Golden Bough: A Study in Comparative Religion*, 2vols., London: Macmillan. (吉川信訳, 2003,『初版 金枝篇』〔上・下〕筑摩書房) .
- Ganz, David, 2012, Touching Books, Touching Art: Tactile Dimensions of Sacred Books in the Medieval West, *Postscripts*, 8(1-2), pp. 81-113.
- Garcia, Michael, 2005, Medieval Medicine, Magic, and Water: The dilemma of deliberate deposition of pilgrim signs, *Peregrinations: Journal of Medieval Art and Architecture*, 1(3), pp. 1-13.
- Geary, Patrick, 1986, Sacred Commodities: The Circulation of Medieval Relics, in Appadurai(ed.), 1986, pp. 169-191.
- Green, Jonathan, 2012, *Printing and Prophecy: Prognostication and Media Change 1450-1550*, Michigan: The University of Michigan Press.
- Gregory, Richard, 1997, *Mirrors in Mind*, Oxford: W. H. Freeman and Company. (鳥居修晃・鹿取廣人・望月登志子・鈴木光太郎訳, 2001,『鏡という謎：その神話・芸術・科学』新曜社) .
- Haasis-Berner, Andreas, 2002, Pilgerzeichenforschung. Forschungsstand und Perspektiven, in Hartmut Kühne, Wolfgang Radtke, Gerlinde Strohmeier-Wiederanders(Hrsg.), *Spätmittelalterliche Wallfahrt im mitteldeutschen Raum. Beiträge einer interdisziplinären Arbeitstagung, Eisleben, 7.-8. Juni 2002*, Berlin: Humboldt- Univ., S. 63-85.
- Hahn, Cynthia, 1990, Loca Sancta Souvenirs: Sealing the Pilgrim's Experience, in Robert G Ousterhout(ed.), *The Blessings of Pilgrimage*, Urbana: University of Illinois Press, pp. 85-96.
- Hahn, Cynthia, 2017, *The Reliquary Effect: Enshrining the Sacred Objects*, London: Reaktion Books.
- Herbers, Klaus and Hertmut Kühne(eds.), 2013, *Pilgerzeichen- „Pilgerstraßen“*, Tübingen: Narr Verlag.
- Homer, Ronald F., 1991, Tin, Lead and Pewter, in John Blair and Nigel Ramsay(eds.), *English Medieval*

- Industries*, London: The Hambledon Press, 1991, pp. 57-80.
- Hooper, Steven, 2014, Bodies, Artefacts and Images: A Cross-cultural Theory of Relics, in James Robinson, Lloyd de Beer, and Anna Harnden(eds.), *Matter of Faith: An Interdisciplinary Study of Relics and Relic Veneration in the Medieval Period*, London: The British Museum, pp. 190-199.
- 猪刈由紀, 2009, 「中世都市ケルンと巡礼制度」『比較都市史研究』28 卷 2 号, pp. 39-53.
- 岩井 洋, 2018, 「出現・奇跡・奉納——西欧カトリック社会における奉納をめぐる宗教システム——」『帝塚山大学文学部紀要』39, pp. 1-17.
- Jeater, Mariel, 2020, The Art of Popular Piety: Pilgrim Souvenirs from the Museum of London Collection, in Rembrandt Duits(ed.), *The Art of the Poor: The Aesthetic Material Culture of the Lower Classes in Europe 1300-1600*, London: Bloomsbury, pp. 89-98.
- Kinser, Samuel, 1986, Presentation and Representation: Carnival at Nuremberg, 1450 -1550, *Representations*, 13, pp. 1-41.
- Klaniczay, Gabor, 2014, Using Saints: Intercession, Healing, Sanctity, in John H. Arnold(ed.), *The Oxford Handbook of Medieval Christianity*, Oxford: Oxford University Press, pp. 217-237.
- Koldewij, A. M.(Jos)and S. de Bodt, 1985, Middeleeuwse pelgrimstekens, *Antiek*, 4, pp. 240-244.
- Koldewij, A. M.(Jos), 1999, Lifting the veil on pilgrim badges, in J. Stopford(ed.), *Pilgrim Explored*, York: York Medieval Press, pp. 161-188.
- Koldewij, A. M.(Jos), 2012, Notes on the Historiography and Iconography of Pilgrim Souvenirs and Secular Badges, in Colum Hourihane(ed.), *From Minor to Major. The Minor Arts in Medieval Art History*, Princeton: Pennsylvania State University Press, pp. 194-216.
- 小牧幸代, 2002, 「インド・イスラーム世界の聖遺物信仰—「遺されたもの」信仰の人類学的研究」『人文學報』(京都大学人文科学研究所) 87、pp. 103-143.
- Kopytoff, Igor, 1986, The Cultural Biography of Things: Commoditization as Process, in Appadurai (ed.), 1986, pp. 64-91.
- Köster, Kurt, 1957, Tilman von Hachenburg. Studien zum Werk eines mittelhessischen Glockengießers, *Jahrbuch der Hessischen Kirchengeschichtlichen Vereinigung*, Band 8, pp. 1-206.
- Köster, Kurt, 1963, Pilgerzeichen-Studien. Neue Beiträge zur Kenntnis eines mittelalterlichen Massenartikels und seiner Überlieferungsformen, in Siegfried Joost(ed.), *Bibliotheca docet: Festgabe für Carl Wehmer*, Amsterdam: Verlag de Erasmus-Buchhandlung, pp. 77-100.
- Köster, Kurt, 1984, Mittelalterliche Pilgerzeichen, in Lenz Kriss-Rettenbeck & Gerda Möhler(eds.), *Wallfahrt kennt keine Grenzen*, München: Schnell & Steiner, pp. 203-223.
- Kriss-Rettenbeck, Lenz, and Liselotte Hansmann, 1966, *Amulett und Talisman. Erscheinungsform und Geschichte*, München: Verlag Georg D. W. Callway. (津山拓也訳, 2014, 『図説 西洋護符大全—魔法・呪術・迷信の博物誌』八坂書房) .
- Kruip, Marjolijn, 2011, Pilgrim Badges: A Case Study from the Netherlands, in Martin Carver and Jan Kläpštil(eds.), *The Archaeology of Medieval Europe Vol 2: Twelfth to Sixteenth Centuries*, Aarhus: The University of Aarhus Press, pp. 420-423.
- Lamy-Lassalle, Colette, 1968, Recherches sur un ensemble de plombs trouvés dans la Seine, musée des antiquités de Rouen et collection Bossard de Lucerne, *Revue des sociétés savantes de Haute-Normandie*, 49, pp. 5-24
- Lee, Jennifer, 2014, Medieval pilgrims' badges in rivers: the curious history of a non-theory, *Journal of Art Historiography*, 11, pp. 1-11.
- Le Goff, Jacques, 1981, *La naissance du Purgatoire*, Paris: Gallimard. (渡辺香根夫・内田洋訳, 1988, 『煉獄の誕生』法政大学出版局) .
- Le Goff, Jacques, 2003, *À la recherche du Moyen-Âge*, Paris: Editions Louis Audibert. (池田健二・菅沼潤訳, 2005, 『中世とは何か』藤原書店) .
- Maiklem, Lara, 2019, *Mudlark: In Search of London's Past along the River Thames*, NY: Liveright Publishing.
- Merback, Mitchell B., 2013, *Pilgrimage and Pogrom: Violoncelle, Memory, and Visual Culture at the Host-Miracle Shrine of Germany and Austria*, Chicago: University Chicago Press.
- 小倉康之, 2019, 「シュパイヤー大聖堂の小型ギャラリー—象徴的意味と宗教上の機能について—」『芸術研究』(玉川大学芸術学部研究紀要) 11, pp. 1-15.
- Rebkowski, Marian, 2013, The Finds of the Pilgrim Badges from the Polish Baltic Coast, in Hartmut Kuhne & Lothar Lambacher(eds.), *Wallfahrer aus dem Osten Mittelalterliche Pilgerzeichen zwischen Ostsee, Donau und Seine*, Frankfurt am Main: Peter Lang, pp. 33-49.

- Rudy, Kathryn M., 2011, *Virtual Pilgrimages in the Covert: Imagining Jerusalem in the Late Middle Ages*, Turnhout: Brepols.
- Rudy, Kathryn M., 2016a, Sewing the Body of Christ: Eucharist wafer souvenirs stitched into fifteenth-century manuscripts, primarily in the Netherlands, *Journal of Historians of Netherlandish Art*, 8(1). <https://doi.org/10.5092/jhna.2016.8.1.1>
- Rudy, Kathryn M., 2016b, *Piety in Pieces: How Medieval Readers Customized their Manuscripts*, Cambridge: Open Book Publishers.
- Scribner, Bob, 1978, Reformation, carnival and the world turned upside-down, *Social History*, 3(3), pp. 303-329.
- Simonsen, Margrete Figenschou, 2018, Medieval Pilgrim Badges: Souvenirs or Valuable Charismatic Objects? in M. Vedeler et.al.(eds.), *Charismatic Objects: From Roman Times to the Middle Ages*, Oslo: Cappelen Damm Akademisk pp. 169-195.
- Smith, Charles Roach, 1846, On Pilgrims' Signs and Leaden Tokens, *Journal of the British Archaeological Association*, 1, pp. 200-212.
- Spencer, Brian, 1968, Medieval Pilgrim Badges, in J. G. N. Renaud(ed.), *Rotterdam Papers: A Contribution to Medieval Archeology*, Rotterdam, pp. 137-153.
- Spencer, Brian, 1980, *Medieval Pilgrim Badges from Norfolk*, Norwich: Norfolk Museums Service.
- Spencer, Brian, 1996, Pilgrim Badge, in Jane Turner(ed.), *The Dictionary of Art*, vol.24, London: Macmillan, pp. 808-809.
- Spencer, Brian, 1998, *Pilgrim Souvenirs and Secular Badges*, London: The Stationery Office.
- Sweeney, Christopher, R., 2018, Holy Images and Holy Matter: Images in the Performance of Miracles in the Age before Iconoclasm, *Journal of Early Christian Studies*, 26(1), 111-138.
- Turner, Victor. and Edith Turner, 1978, *Image and Pilgrimage in Christian Culture: Anthropological Perspectives*, NY: Columbia University Press.
- 魚住昌良, 1997, 「ヨーロッパの中世の鐘と『共同体』」『国際基督教大学学報 III-A アジア文化研究別冊』7, pp. 149-159.
- van Asperen, Hanneke, 2013, Annunciation and Dedication on Aachen Pilgrim Badges. Notes on the Early Badge Production in Aachen and Some New Attributions, *Perigrinations: Journal of Medieval Art and Architecture*, 4(2), pp. 215-235.
- van Beuningen, H. J. E., 2007, Brian Watson Spencer's Good Work, in Blick(ed.), 2007, pp. 17-36.
- van Heeringen, R. M. et. al., 1988, *Heiligen uit de Modder. In Zeeland gevonden pelgrimstekens*, Utrecht: Clavis.
- Vandi, Loretta, 2019, The Holy Land in Paris. Embroidering, Depicting, and Stamping the Passion in a Fifteenth-century Book of Hours (Paris, Bibliothèque de l'Arsenal, MS 1176 A rés.), *Peregrinations: Journal of Medieval Art and Architecture*, 7(1), pp. 43-86.
- 渡邊裕一, 2006, 「中世後期ニュルンベルクにおける謝肉祭慣行とその変容——15～16世紀のシェンバルトラウフを例に」『西洋史論叢』(早稲田大学西洋史研究会) 28, pp. 113-125.
- Watteeuw, Lieve, and Hannah Iterbeke(eds.), 2018, *Enclosed Gardens of Mechelen: Late Medieval Paradise Gardens Revealed*, Amsterdam: Amsterdam University Press.
- Webb, Diana, 2001, *Pilgrims and Pilgrimages in the Medieval West*, NY: I. B. Tauris.